

主 訴

(保護者)

- ・ささいなことで自分の気持ちが押さえられなくなる。

(担任)

- ・授業規律が守れない。
- ・気に入らないことがあると癇癪を起こしてパニック状態なる。
- ・パニック状態になると自傷行為を起こしたり教室を飛び出したりする。

判 断

- ・検査結果から知的な発達の遅れは認められない。
- ・場面理解の弱さや社会性の弱さがあり、初めての事に対する抵抗感が大きい。
- ・若干のこだわりがあり、多弁ではあるが言語コミュニケーションが一方向的になる傾向が見られる。
- ・気持ちの切り替えができにくく、嫌なできごとに対するフラッシュバックも見られる。
- ・対人面での弱さはあるが、友達を求め一緒に楽しみたいという気持ちは強い。
- ・自己肯定感が弱く、耐性がない。

以上のような点から、集団生活の中で頻繁に起こるパニックは、本児が自分なりのこだわりを崩せないことや、時間的流れのわかりにくさ、他者の感情に対する理解の弱さ等、本児の独特の認知特性が要因であると思われる。

支援と配慮

< 通常の学級における支援 >

- ・具体的な指示や流れの予測を提示し、活動の見通しを持たせてパニックを未然に防ぐ。
- ・トラブルが起きた時には、クールダウンさせて時間をおいてから本児の気持ちを充分聞き、相手の気持ちや行動をわかりやすく説明する。
- ・生活面・学習面共にスモールステップで目当てを立て、確実にクリアしていくことで自己肯定感を持たせる。
- ・本児の長所や成長を評価し、子ども同士でも認められるように配慮する。

< 通常の学級外の支援 >

- ・本児の特性と不適応行動時の対応について校内の教職員の共通理解を図る。
- ・通級指導教室では小集団での遊びを通して、他者との関わり方や気持ちの伝え方等のソーシャルスキルトレーニングを行う。
- ・担任・保護者・通級指導教室が連携し、本児の特性を理解して長い見通しを持った教育方針を立てて行く必要がある。

その後

指導体制

新学年の担任への細かな引き継ぎをし、進級後も校内体制の検討・確認をした。
また、担任と保護者が定期的に相談を重ねることで本児の成長や課題が明らかになり、学校と家庭で一貫性のある対応をする事ができた。

児童の変化

- ・パニックの回数は減った。
- ・若干興味の偏りはあるものの、遊びの中で他の児童の好みに合わせながら楽しむ事ができるようになってきた。
- ・初めての事に対して抵抗感が減り、苦手なことでも挑戦してみようという気持ちを持ち、いろいろな結果を受け入れられるようになってきている。

課題

- ・頭では理解できていて、模範的な行動をとろうと努力するが、時々気持ちとの折り合いがつかなくなり、感情が高ぶる事がある。
- ・周りに合わせようとする事で起こるストレスを和らげるための指導を考える必要がある。

